
Ver Oír y Callar

タイトル見る、聞く、黙る マラ・サルバトゥルチ 13との1年

Ver, oír y callar. Un año con la Mara Salvatrucha 13

著者 フアン・ホセ・マルティネス = ダビュイソン

Juan José Martínez D'aubuisson

出版社 ペピータス・デ・カラバサ Pepitas de calabaza

出版年 2015年

ページ数 128ページ

読者対象 一般。特に中米事情、青少年問題（暴力、犯罪、貧困）に興味のある人。

レポート作成 児玉さやか

概要

年を通して、著者は連日「グアナコス」を訪れる。それは彼らの集団のしくみを内側から見るためではなく（そんなことは不可能だ）、許しが出れば、特権的な見学者として彼らを見るためなのだが、だからと言って受け入れられているわけではない。網羅的な社会学的調査を意図してもしない。我々読者に対し、そこで唯一可能な悲観的文学という視点から、彼らの日々を語っている。

目次

プロローグ フアンの狂気 7

序文 13

フィールド日誌

丘の上のコミュニティー 25

真実のほうき 30

エル・デスティエーノのみかじめ料 34

カルラの犯した罪 36

戦いの前触れ 39

マラスのピエロたち 43

俺らは悪だ 45

伝説 49

ゲーム 53

その庭に男はいない 54

恋人作戦 61

カルラを映す鏡、ラ・セカ 65

メス犬の負け戦 69

変人、チェス、リトル・ダウンのタトゥー 72

インフォーマント 77

マラス、シャンパン、写真 81

カラソの最後の旅 84

グアナコスの反撃 90

リトル・ダウンの支配 94

グアナコスの要塞 100

バス 105

火には火を 111

エピローグ 厳しさを増す日々 119

内容

プロローグ フアンの狂気 オスカル・マルティネス (P.7~11)

(ジャーナリストである著者の弟による記述)

」研究の第一人者であり、本書はその手法を最もよく示している。危険を顧みず、あるコミュニティがギャングと共生することの意味を探るため、丘の上の縄張りに足繁く通う著者は、読者に対し、ギャングにも人間的な生活があることを伝えようとする。本書はマラスに関する数少ない良書だが、真の意義は著者の狂気とも言える気概にある。

序文 (P.13~21)

との決裂、米国からの追放、といったエルサルバドルにおける2大ギャングの繁栄の歴史を振り返り、執筆の経緯とフィールドワークの手法に触れる。

フィールド日誌 (P.23 ~ 117)

頁。著者の一人称で、原則として時系列で語られる。
以下、1年を通じて起こった出来事の大まかな流れを要約する。)

【主な登場人物・組織名】

私(著者)：人類学者。研究のためMSの一派「グアナコス」の丘に1年間通う。

グスタボ：MSが通う青少年センターの所長。修道会から派遣されてきたようだ。

エル・デスティエーノ：「グアナコス」の温厚なリーダー。更生の一環でパン作りに励む。

リトル・ダウン：「グアナコス」の刺客。残虐な性格で、次期リーダーとなる。

カルラ：丘に住む少女。リトル・ダウンに手込めにされ、その子を身ごもる。

マラ・サルバトゥルチャ13(MS)：マラス2大勢力の1つ。「サルバドル人の群れ」の意。

グアナコス：MSの一派で「仲間」の意。丘の上を縄張りとし、主に10代の少年からなる。

バリオ18：マラス2大勢力のもう片方で、MSのライバル。「18番街」の意で「18」とも。

コロンビア・ロコテス：「18」の一派。丘の中腹を拠点とし、グアナコスと抗争を繰り返す。

【あらすじ】

の掟「見る、聞く、黙る」
を破ると致命的だ。住民の
少女がギャングに折檻を受
け泣き叫ぶのを見ても、黙

って見過ごすしかない。エル・デステイーノは数ヶ月前に刑務所から出て、この一派を結成したリーダーだ。穏やかな性格で、争いよりもパン作りに精を出すようになり、徐々に権力を失うが仲間からは崇拜されている。一方、刺客のリトル・ダウンは血気盛んで、銃による脅しや殺人を繰り返す。丘には堅気の住民も多く、子どもたちをギャングの女やメンバーに取られるのを恐れつつMSの掟を守って暮らす、ライバルグループとの抗争で巻き添えを食うこともある。

私は何人もの若者が殺された丘のフィールドでギャングとサッカーをしたり、丘の「共同の家」で住民の子弟向けの補習授業の講師を務めたりと、様々な角度からギャングの住むコミュニティの様子と抗争の行く末を知ろうとする。ギャング同士の会話には逆さ言葉など独特なスラングが挟まれ、理解不能だ。連日ライバルの縄張りを抜けて丘を登り下りするのは背筋が凍るが、なぜギャングが仕事をせず、ライバルの襲撃を恐れながら暮らさなくてはいけないのか、暴力の根源を知りたい一心で丘に通い続ける。

丘に来て半年が過ぎ、グアナコスリーダーが交代する頃、抗争を繰り返してきたライバルグループの「コロンビア・ロコテス」との間で決定的な事件が起こる。新リーダーのリトル・ダウンが指示した攻撃により猛烈な報復を受け、丘の住民がバスごと火をつけられて多数の犠牲者を出したのだ。事件後、リトル・ダウンが過去に何件もの殺人を犯した罪で逮捕され、戦いは収束する。丘には静寂が戻るが、また争いは繰り返されるだろう。

エピローグ 厳しさを増す日々 (P.119~P.122)

大ギャングが前代未聞の和解に至った。とはいえ、貧困に喘ぐ人々の生活は厳しさを増すばかりだ。(追記:エル・デステイーノは2013年に「18」の刺客に命を奪われ、2年後、リトル・ダウンは警察に殺された。)

所感・評価

代を主とした殺人集団の動向を追う衝撃的な内容のため、各話を一息で読み切ることができる。学術的な文章ではなく、簡潔な文体で客観的に記述されており、残酷な現実の数々が読者の胸に迫ってくる。

タイトルの『見る、聞く、黙る』はマラスの掟で、見聞きしたことを口外するな、つまり「口は災いの元」を意味する。正式メンバーは全員通称で書かれ、本名が明かされるのは最後、命を落としたリーダーだけ。ギャングの縄

張りに通うのも命がけだが、書籍として出すことは掟破りにならないか。リスク覚悟の一冊だ。

年)が最適だ。同書は殺人事件発生率が世界一と言われるホンジュラスに赴き、主にギャングの元リーダーや脱退者にインタビューを敢行したルポで、開高健賞を受賞している。しかし、これにさらなる臨場感を加えた一冊が、現役のマラスを対象とした本書だと言える。特に、男性ばかりのギャング団に紛れて飲食・喫煙を共にし、性的な罨やタブーの話題まで引き出しているのは圧巻だ。例えば、著者は少年兵を最前線で取材する戦場のジャーナリストであり、私たちはその気概に瞠目せずにはいられない。

読者の胸を詰まらせるのは、ギャングを取り巻く人々の苦悩と悲哀がひしひしと伝わってくるころだ。とりわけ、ギャングに娘を手込めにされタトゥーを彫られた母親の憤りや、バスに火をつけられ、焼け死ぬ寸前に窓ガラスを叩き割り、我が子を外に放り投げた母親の執念がありありと描かれ、彼女たちが犠牲者数に集約される「データ」ではなく、名前と感情を持ち、家族と生活のある「人間」なのだわかる。そしてもちろん、著者自身も抗争や死を恐れたり、ギャングたちとのサッカーで一喜一憂したりと人間味があり、親近感がわく。中米事情や未成年者の犯罪に興味がある読者だけでなく、世界の時事問題に関心のある読者にも幅広く受け入れられそうだ。

翻訳では、ギャングの会話に混じるスラングや文法の誤り、中米特有の訛り、ギャング名に含まれる英語混じりのスペイン語(スパングリッシュ)に留意したい。

試訳【その庭に男はいない】

(P.57の下から13行目～最後の行)

「なあ、ファン!

サ、サッカーしようぜ!」 グアナコスメンバーが土埃の立つ地面にボールを弾ませながら誘ってきた。すっかり忘れていた。数日前、コミュニティのフィールドでサッカーをしようと約束したのだ。

歳くらいのギャングで、話すたびにどもる。エル・グアポの風貌はメディアに出てくる「容疑者」そのもの。黒髪で、黒い目、身長160センチ、やせ型、タトゥーなし、褐色の肌をしている。

ものすごく怖かったが、やろう、と返事した。彼から、コミュニティの崖の下にあるフィールドに行くんだ、心配するな、まじめな試合じゃないから、ただ暇を潰したい奴が集まるだけだ、と説明された。[中略]

(P.59の14行目～P.60の19行目)

試合は続行され、観客席はサッカーファンと新たに順番を待つチームで埋まってきた。皆がだんだん興奮してくる。タイヤを積み上げた座席から、スタジアムさながらに野次が飛ぶ。熱気がさらに高まり、双方のゴールキーパーが怒鳴るように指示を出す。私は急にエル・リック(学者先生)ではなくなり、エル・ネグロ(黒人)の罵声を浴びた。

「動けよお前、チクショー! そいつに舌でも出してやれ!」。

本もシュートを打っている。どれも決まらない。ふと私にボールが来て、さっきのフォワードが、もう何度も私に恥をかかせた奴が、闘牛の牛よろしく地面を蹴りながら近づいてきた。さあ右か左か、足を開いては閉じ、抜かしてみると私を挑発する。観客席からひそひそ声が漏れる。私は馬鹿にされているのだ。強いプレッシャーを感じ、

あまり考えずに動こうと決めた。左にフェイントをして、ボールを軽く蹴り出し、相手の股の下をゆっくり抜かした。観客席から長い「オーーレ！」の叫び声が聞こえて、私は思い切りボールを蹴った。エル・グアボがそれを胸で受け、絶妙なセンタリングを上げて、もう一人がヘディングで敵のゴールに押し込んだ。感動はひとしおだ。私は思わず得点者と抱き合い、皆と同じようにスラングで叫んでいた。この瞬間に試合が何か大切なものに思えて、フィールドは居心地が良くなった。

日が怖いのか？」「なぜ誰かが現れて我々を撃つ可能性があるんだ？」「なぜ何人もの若者が殺されたフィールドで今もサッカーをしているのか？」。

そんな疑問に答えを出したいという激しい欲望だけが、私をここに繋ぎ止めている。

Source URL: <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/ver-oir-y-callar>